

人間 : 吉田徳次郎先生

渡邊, 明
九州工業大学 : 名誉教授

濱田, 秀則
九州大学大学院工学研究院社会基盤部門 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/4483181>

出版情報 : Journal of PRESTRESSED CONCRETE. 62 (1), pp.56-58, 2020-01. Japan Prestressed Concrete Institute

バージョン :

権利関係 :



人間：吉田徳次郎先生

渡邊 明*¹ 濱田 秀則*²

<空白行>

1. 神様・吉田徳次郎先生

吉田徳次郎先生（写真-1）のご紹介文を記述することを依頼された。著者の一人（渡邊）は、最近、吉田先生に関する記事を執筆している¹⁾。また、濱田は文献2)の中で、吉田先生のことについて触れている。これまでに多くの方が吉田先生のことを紹介しておられるので、あらためて何を書けばよいのか、少なからず戸惑いもあった。渡邊は文献1)において、吉田先生のことを“コンクリートの神様”“我が国コンクリートの育ての親”と記した。濱田は文献2)において“我が国のコンクリートの父”と記した。そこで、本稿においては、技術的視点に留まらず、むしろ人間的側面の視点で、“人間・吉田徳次郎先生”を追求することとした。



写真-1 吉田徳次郎先生

2. 吉田先生の慧眼：鉄筋下面の空隙について

まず、吉田先生の研究論文³⁾をあらためて読んでみた。吉田先生が行われた実験、またその結果の記述は大変シンプルであり、結果を淡々と記述している印象がある。読んでみて、一つ大きく印象に残ることは、自らの実験データを本当によく信用している、ということである。関連する既往の研究を十分に確認し、実験の計画を十分に練り、正確に実験を実施したことに対する揺るぎない自信がその背景にあるのであろう。考察と結論を述べる際に時折、「・・・と信ずるのである。」と結ばれている。このような言葉は現在ではほとんど用いることはない。この文献3)は、コンクリートの沈下により、水平鉄筋の下面に空隙が発生すること、この空隙により鉄筋の付着強度が鉛直鉄筋の付着強度に比べて大きく低下することを述べたものであり、さらに、耐久性にも影響を及ぼすこと、特に海岸の鉄筋コンクリート構造物に対してその影響が大きく、鉄筋の腐食が促進される可能性にまで言及している。恐るべき洞察力である。この実験を含む一連の実験結果をもとに、コンクリートの打設前にセメントペーストを鉄筋に薄く塗りつけておくことを推奨するに至っている⁴⁾。これは、吉田先生の研究に対する姿勢を知ることのできる一例であるが、自らの実験を信頼し、その実験結果から多くのことを導き出す研究手法は今なお我々に多くの示唆を与えるものである。

略年表

- 1888 (明治21) 10月15日 神戸市に誕生
- 1906 (明治39) 石川県立第一中学卒業
- 1909 (明治42) 第四高等学校（金沢）卒業・東京帝国大学工科大学土木工学科入学
- 1910 (明治43) 柴田睦作が東京帝国大学工科大学で鉄筋コンクリートの講義を開始・コンクリートに出会う
- 1912 (明治45) 東京帝国大学工科大学卒・九州帝国大学講師（大正1）赤羽の工兵隊に入営（1913まで1年間）
- 1913 (大正2) 九州帝国大学工科大学講師
- 1914 (大正3) 同 助教授
- 1919 (大正8) 在外研究員・イリノイ州立大学（A. N. Talbot教授）など、14か月間
- 1922 (大正11) 九州帝国大学工科大学より博士号
- 1924 (大正13) 九州帝国大学教授
- 1928 (昭和3) 土木学会コンクリート調査委員会委員
- 1931 (昭和6) 土木学会鉄筋コンクリート標準示方書制定
- 1935 (昭和10) 鰯の実験始める
- 1938 (昭和13) 東京帝国大学教授
- 1939 (昭和14) 勲二等瑞宝章・土木学会RC標準示方書委員長
- 1947 (昭和22) 鰯の実験結果を東京大学教官輪講会で披露
- 1949 (昭和24) 東京大学定年退官
第37代土木学会会長（1950年5月まで）
- 1950 (昭和25) 九州大学名誉教授
- 1951 (昭和26) 日本学術会議会員（1953年12月まで）
- 1958 (昭和33) プレストレストコンクリート技術協会初代会長（1960年3月まで）
- 1959 (昭和34) 土木学会名誉会員
- 1960 (昭和35) 9月1日 逝去（72歳）・正三位勲一等 瑞宝章
- 1961 (昭和36) 吉田賞・吉田研究奨励金開始

*1 Akira WATANABE: 九州工業大学 名誉教授

*1 Hidenori HAMADA: 九州大学大学院 工学研究院 教授

3. 吉田先生とプレストレストコンクリート

吉田先生とプレストレストコンクリートとのかかわりは、仁杉巖氏、平山復二郎氏との関係の中に知ることができる。

仁杉巖氏は、我が国初のプレストレストコンクリート製鉄道橋である第一大戸川橋梁の建設で知られるが、国鉄の技術研究所時代に吉田徳次郎先生に教えを受けたことがその背景にあったと回想する^{5) 6)}。「吉田先生は同研究所の嘱託として、昭和15年ごろから10年あまり、毎週半日ずつ来ておられた。私は、昭和18年から24年まで研究所にいたので、その間ずっと先生のご指導をうけた。先生に言われた『仁杉君、机の上でいくら勉強しても実際にやってみないと本当のところは分からないよ。PCの桁を早く造って実験を始めなさい』の一言で、PCの修得に邁進できた」と記している。

平山復二郎氏は、昭和27年(1952年)3月のピー・エス・コンクリート株式会社誕生時の初代代表取締役社長である。吉田先生とは、東京大学工学部土木工学科の明治45年卒業の同期であると同時に、中学時代からの竹馬の友でもあった人であり、吉田先生を顧問として新会社に迎えている。平山氏は、「コンクリートに関する問題は、万事吉田君の指導を受けた。吉田君からは、知識と一緒に知恵がもたらされた」と回想している⁷⁾。

吉田先生は、昭和30年(1955年)の「プレストレストコンクリート設計・施工指針」の制定委員会委員長、昭和33年2月発足の「プレストレストコンクリート技術協会」の初代会長をお務めになるなど、我が国のPC技術の発展に大きく貢献されている。その吉田先生が、「九大時代の昭和10年か11年ぐらいからプレストレストコンクリートの講義はしていました。ただし、こういうものがあるという程度で、むろんデザインすることは何も教えない、ただ図だけをやったのを覚えています」と述べられており⁸⁾、誰よりも早く、PCという新技術に関心を寄せ、学生に教えておられたことがわかる。著者の一人(渡邊)は、1955年(昭和30年)に九州大学(旧箱崎キャンパス)正門前の古本屋で「PRESTRESSED CONCRETE by Y. Guyon」との運命的な出会いをしたのであるが⁹⁾、その最初の持ち主は吉田先生の講義を聞いた誰かであったのかもしれない。

4. 性能照査型設計の原点

近年、コンクリート構造物の設計は、仕様設計から性能照査型設計へと大きく変わってきた。これは、ISOによる世界的な潮流であることは間違いない。しかし、昭和24年版コンクリート標準示方書の前文に以下のような吉田先生の記述があり、ここに性能照査型設計への原点を見ることができる。

「・・・但し、この示方書が、そのまま適用できない場合もあるのであって、重要な工事はもっと制限的な条項を必要とする場合もあるし、また場合によっては条項を多少緩和してもよい場合もある。たとえば、・・・

1)・・・細骨材の選定にあたっては、・・・工事現場の事

情によっては規定に合わない粒度のものを用いる方がよい場合もあるわけである。

2)・・・粗骨材の最大寸法についても、・・・構造物の種類、施工の難易などを考えて適当な最大寸法を定めなければならないのである。

3)・・・コンクリートの配合も、それぞれの使用目的に応じて経済的になるように、これを定めなければならない。標準示方書を適用する場合に、字句にこだわりすぎではないのであって、示方書の本質をよく理解し、必要があればこれを適当に修正して活用しなければならないのである。・・・」

このように、仕様設計の黎明期にあって、すでに吉田先生は将来の性能設計の到来を見通されていたのではないかと思われるのである。まさに、先生の慧眼を示す一つの事例として特記しておきたい。

5. 人間：吉田徳次郎先生

人間・吉田徳次郎先生を知りたいと思い、文献10)を改めて開いてみた。この中に、吉田先生とつながりの深い方々が先生のことを回想して述べられたことが記録されている。この中から、人間・吉田徳次郎先生を探ってみた。

谷藤正三氏(建設省土木研究所所長)：“我々の方が顎が出そうになってくるとちゃんと休憩の時間をつくって下さる。(コンクリート標準示方書の総仕上げの読み合わせ会にて)”

篠原謹爾先生(九州大学名誉教授)：“吉田先生は自ら現場服装で監督され、終わりましたら一同に豚汁の中食をご馳走されました。(学生と一緒に九州大学内の道路のコンクリート舗装をする際に)” “吉田先生は研究のことについては極めてきびしい方でありました。しかし、指導されるときには親身になって相手のことを考えておられました。” “先生の資料の整理のやり方は独特で、雑誌などの中に必要な論文があれば、その部分だけぬきとり、あとは雑誌ごと捨てる。”

市田洋氏(清水建設副社長)：“「このごろ徳さんは大分消耗している。元気がない。だれか行って激励してこなきゃいかぬ」ということになりまして、・・・一升びんを下げた徳さんのところへ参りましたら「おう、来たか」と眼鏡をおでこに上げて、それから湯飲みを2個ご自分で蛇口のところへ行って小さい洗面器で洗って、土木の会議室の隣の教官室で「じゃ飲もうか」ということになって、一升を2人で2時間半ぐらいかかって空けたわけでございます。・・・「おれはもうじき定年になるんだ。コンクリートしか知らないで今まで過ごした男にどうして飯が食えるんだ。東電の諸君に頼んで、水力発電所の番人か何かにしてもらって飯を食うよりしょうがねえな」こうおっしゃる。・・・私が何とか幽霊を5人ばかしつuckingお助けします、そういいました。・・・その後、國分先生ほか数名の方に「いざとなったら、市田が悪いことをしておれを助けてくれるといった」という話を数回なされたようです。”

百島祐信氏(鹿島建設技術研究所所長)：“助詞と助動

詞だけが日本語で、後は全部英語のしかも早口で何時もその2時間を目一杯講義される。・・最後に教鞭を置かれた時に拍手が起り、先生は背筋をピンと立てて大股に教室を出て行かれた。「これで講義は終るが、子孫のために仕事をすることが進歩の要訣である」と力強く述べられました。(昭和24年3月 東大最終講義にて) この日この言葉を聞いて闊然と目が開いたような気持になり、それからの一生を土木技術者として捧げる心を決めた。

これらの回想から、慈愛に満ちた人間・吉田徳次郎先生を垣間見ることができるように思う。

6. 教えない教育

“よいコンクリートをつくるにはセメント・水・骨材のほか知識と正直、親切を加えなければならない”と説くことを、先生は現場説法の常とし、教育の基本理念は自らの背中を学生たちに晒し、直接には教えない教育を旨とされた。“技術者にとって最も大切な能力は独創力であって、それを培う道は自主勉学にある”というのがその主旨であるが、厳しさの中に優しさを併せ持つ“人間・吉田徳次郎先生”なればこそこの“教えない教育”であったのではないだろうか。

参考文献

- 1) 渡邊 明：「コンクリートの神様」吉田徳次郎 一学生には教えるな！，土木学会誌，Vol. 103, No. 5, May 2018.
- 2) 濱田秀則：コンクリートの“こころ”を伝える，公益信託土木学会学術交流基金の30年，公益社団法人土木学会，平成31年3月31日
- 3) 吉田徳次郎：新しい混凝土の沈下(Settling)と，混凝土と鋼との粘着強度との関係に就て，九州帝国大学工学彙報，第四卷，(1929)
- 4) 例えば，コンクリートハンドブック，吉田徳次郎著，養賢堂版，昭和24年(1949年)5月発行
- 5) 仁杉 巖：吉田徳次郎博士の思い出，土木学会誌，45-10，昭和35年10月(吉田徳次郎先生の追憶)
- 6) 仁杉 巖：挑戦 一鉄道とコンクリートと共に六十年一，交通新聞社，2003年10月
- 7) 平山復二郎：吉田徳次郎博士の思い出，土木学会誌 45-10，昭和35年10月(吉田徳次郎先生の追憶)
- 8) 日本におけるプレストレストコンクリートのルーツーPC創生期を偲ぶ座談会記録一，プレストレストコンクリート，Vol. 20, No. 1, 1978年1月(座談会：昭和34年3月24日(火)丸ノ内会館(千代田区丸ノ内))
- 9) 渡邊明：セメント協会の講演で導かれた人生，セメント・コンクリート，No. 872, 2019. 10
- 10) 吉田徳次郎先生の御遺徳を偲んで，社団法人土木学会 吉田賞選考委員会，平成5年12月25日

注) これまでの文献は「吉田徳次郎」と書かれたものが大半であるが，文献3)にあるように「吉田徳次郎」が正し

い表記である。本文では「吉田徳次郎」とすべて表記した。

【2019年 月 日受付】
＜原稿書式 2016. 5. 13版＞